

教育最前線

連載 32

●自操安全運転プログラム

リハビリテーション中の方の運転復帰をサポートする安全運転教育



クルマの死角や正しい運転姿勢をインストラクターが説明

hで直線コースを走行し、指
ブレーキングでは30km
ブレーキングとパイロンスラロ
ームに取り組み。

運転復帰をめざし、リハビリ中の山口さん（56歳）は高次脳機能障害支援施設「ワークセンター大きな木」（静岡県浜松市）が実施している「障がい者のための自動車運転技能訓練プログラム」に加え、ホンダが実施している実車を使った「自操安全運転プログラム」を1月9日に交通教育センターレインボー浜名湖で受講した。

運転復帰によって 社会生活の幅が広がる

ホンダでは「より多くの人にクルマを操る楽しさを提供したい」「交通社会に参加するすべての人の安全を守りたい」という理念を实践するために、身体が不自由な方に車両運転時の安全性確保に向けた教育機会を提供している。その1つに、身体の不自由な方や障がい克服して運転復帰をめざす方を対象にした「自操安全運転プログラム」があり、ホンダの交通教育センターに導入されている。

「自操安全運転プログラム」は約1時間。交通教育センターレインボー浜名湖の大島一郎インストラクターが同乗し、同センターのコース内で進められる。山口さんは2年ぶりに運転するという事で、運転を始める前に、あらためて正しい運転姿勢やクルマの死角について確認してもらった。そして、トレーニング車両の運転席に山口さん、助手席に大島インストラクター、後部座席に建木さんが乗車。慣熟走行を十分に行った後、プログラムに取り組み。

運転に必要な基本行動を 実車走行により確認

健さんは、「現段階では「運転は困難」と病院から判断された方に対するケアは充実しているとはいえない。公共交通機関が整備されていない地域にお住まいの方にとっては、クルマの運転は仕事や生活をしていく上で必要なことです。運転できることで、社会生活の幅が大きく広がります。つまり、リハビリをして運転に支障がないと判断されるまでの期間をいかに短くできるかが重要と言えるでしょう。リハビリ中の方に、少しでも安全にかつできるだけ早く運転復帰していただくために、医療機関、研究機関、支援施設と交通教育センターレインボー浜名湖との連携は不可欠です」と話す。

プログラムが終了し、受講した山口さんは「自分が思っていた以上の運転ができました」と笑顔を見せた。「うまくできなかったら、運転を断念する覚悟で臨みました。でも、自分の思い通りのハンドル操作ができ、あらためてクルマの運転は、とても楽しいと感じました。まだ速度の調整や安全確認に課題があることもわかったのですが、こうした訓練を重ねていきたいと思えます。運転を再開できたら、離れた場所にいる仲間と将棋をさすのが夢です」。

「運転が楽しいとあらためて感じた」

運転が楽しいと あらためて感じた

定されたパイロンに合わせ停止する。次に、速度40km/hで同様のことを繰り返す。パイロンスラロームではジグザクに配置されたパイロンの間を一定の速度を維持しながら走行。大島インストラクターは1回目の運転の様子を確認すると、ハンドルの旋回ノブを取り付ける。旋回ノブを使って、スムーズなハンドル操作ができるようになると、「車体ができるだけパイロンに近づけて通過してみよう」「Uターンをする時はウインカーを出してみよう」と課題を増やす。こうしたトレーニングを繰り返して、状況に合わせて複合的な判断をしながら運転操作ができるかどうかを山口さんに確認してもらった。



インストラクターの指示に合わせて、ブレーキングとパイロンスラロームに取り組み

ハンドル操作がスムーズにできるよう旋回ノブを取り付ける



久しぶりに実車を運転したということを考えれば、今日の運転状況は予想していたより良かったと思えます。山口さんの弱点を、大島インストラクターに理解してもらったので、今後はそれを克服するために個別のプログラムを検討していく必要があるでしょう」と、山口さんの運転復帰に向けて手ごたえを感じている。

最後に、大島インストラクターは山口さんに「今日は運転復帰に向けて第一歩ととらえて、地道にトレーニングを重ねてほしいと思います」とアドバイスした。

※1「障がい者のための自動車運転技能訓練プログラム」には認知訓練や「リハビリテーション向けの運転能力サポートソフト※2」を用いた訓練も含まれている。

TOPICS 1 ●リハビリテーション向け運転能力評価サポートソフト

リハビリ中の方の運転復帰に向けて 問題提議や課題解決のための意見を交換

1月24日、ホンダ青山ビルにて「リハビリテーション向け運転能力評価サポートソフト（以下サポートソフト）活用に関する意見交換会」が開催され、病院の作業療法士や大学の研究者など医療関係者14名が参加した。サポートソフトは、既に全国60カ所の病院やリハビリ施設が導入している。導入したいという医療関係者に、運転の再開を希望される方の交通社会への復帰に向けて問題提議や課題解決をするための場としていたことが、この意見交換会の目的である。

まず、参加者を代表して、聖隷三方原病院（静岡県浜松市）リハビリテーション部作業療法士の鈴木香葉子さんと、新潟医療福祉大学医療技術学部（新潟県新潟市）作業療法学科助手の外川佑さんが、患者の方の運転復帰を支援するための具体的事例を紹介した。そして、参加者が各々のサポートソフトの使用実態、収集したデータの活用方法などに関する情報や意見を交換。安心安全な運転の再開・継続について議論を深めた。



※2リハビリテーション向け運転能力評価サポートソフト＝リハビリテーション中の方、作業療法士などと一緒に四輪での運転復帰に向けて運転に対する評価・訓練をサポートするためのソフト。運転環境の模倣的な再現により、運転操作の手足の複合的動作を楽しみながら行うことができる。詳細は下記ホームページを参照。
<http://www.honda.co.jp/simulator/safetynavi/rehabilitation.html>

現場訪問 ●エンジョイ・ミーティング in 埼玉

「安全」に「楽しく」「バイクに親しんでもらおう」

昨年12月21日、交通教育センターレインボー埼玉で「エンジョイ・ミーティング in 埼玉」が開催された。これは、より多くの方々に「安全」に「楽しく」バイクに親しんでもらうことを目的としたイベントで、100名のライダーが参加した。



会場となった交通教育センターレインボー埼玉には100名のライダーが集まった



インストラクターが一人ひとりの運転を見ながらアドバイス



元Hondaワークスライダーの宮城光さんのトークショー



インストラクターが華麗な技の数々を披露



プログラムの一つ、HMS[※]では、参加者が初級、中級、上級、オフロードに分かれ、より安全な走りをめざすためのトレーニングを行った。初級では、インストラクターが「認知・判断・操作」で最も重要なのは認知です。できるだけ先を観て、前方の情報をより早く正確にキャッチしてください」と強調。パイロンスラロームでは目の前ではなく、常に先のパイロンに視線を向けることに意識しながら、参加者は繰り返し練習に取り組んだ。また、初めての参加者でもHMSをより気軽に楽しみながら体験してもらったため、初級クラスの内容をショートバージョンで実施したエンジョイHMSも行われた。

プログラムの一つ、HMS[※]では、参加者が初級、中級、上級、オフロードに分かれ、より安全な走りをめざすためのトレーニングを行った。初級では、インストラクターが「認知・判断・操作」で最も重要なのは認知です。できるだけ先を観て、前方の情報をより早く正確にキャッチしてください」と強調。パイロンスラロームでは目の前ではなく、常に先のパイロンに視線を向けることに意識しながら、参加者は繰り返し練習に取り組んだ。また、初めての参加者でもHMSをより気軽に楽しみながら体験してもらったため、初級クラスの内容をショートバージョンで実施したエンジョイHMSも行われた。

元Hondaワークスライダーの宮城光さんのトークショーが行われ、宮城さんがモトGPで活躍する選手としてのライディングの特徴を解説。また「現代にサーキット以外では、どのよう



参加者に好評だったHondaの新型バイクの試乗会

な練習をしていたか」という参加者からの質問に、ホンダの交通教育センターでインストラクターと一緒に練習したエピソードを紹介した。会場にはVER1200F、CBR600RRなどホンダの新型バイクが展示され、参加者はトレーニングの休憩時間を使って試乗した。イベントの最後には、インストラクターがオフロードバイクに乗り、華麗な技を参加者に披露した。

※HMS＝Honda モーターサイクリスト・スクール。個人のお客様に楽しく安全運転の知識を身につけていただくことを目的とした参加体験型のスクール。全国7ヵ所のHondaの交通教育センターで開催しており、お客様のスキルやニーズに合わせて、様々なコースが用意されている。

TOPICS 2



見通しの悪い場所から飛び出してきたものを発見してから、ブレーキをかけてもすぐに停止できないことを体験してもらう。その後、見通しの悪い交差点での安全な通行方法についてアドバイスする



滋賀大学「行政の課題解決プロジェクト」 滋賀大学の学生が自転車の交通安全教室を開催

滋賀大学経済学部（滋賀県彦根市）の就業力育成支援室では、学生の「働き方や社会との関わり方を考える力の育成」を目的としたプロジェクト科目を実施している。その一つが「行政の課題解決プロジェクト」自転車対策と公共交通をテーマに。同プロジェクトは昨年10月にスタートし、受講する1〜4回生の学生18名が彦根市都市建設部交通対策課の協力を得て、市内の交通課題の解決に向けた検討を行った。

プロジェクト代表である経済学部4回生の田代絵梨佳さんは「私たちは彦根市を活性化させるための実践的な活動に取り組みしてみたいと考え、この科目を受講しています。彦根市が抱える「自転車交通安全の普及啓発」「放置自転車の削減」「路線バスの乗車向上」という3つの課題についての解決策を議論しました」と話す。そして昨年12月15日、学生たちが8回にわたる授業の成果を交通政策イベントという形で発表した。会場は彦根市内の駐車場で、3つの課題



プロジェクト科目を受講している滋賀大学の学生18名（1〜4回生）が交通政策イベントを実施

「自転車交通安全の普及啓発」のブースでは、出会い頭事故の模擬体験を実施。バスを使って、見通しの悪い交差点を再現し、そこを来場者に自転車を通して通してもらった。通過する直前に、バスのカゲに隠れている学生が新聞紙でつくったボールを投げる。ボールを確認してから、ブレーキをかけるのはボールとぶつかってしまうことを実感してもらった。自転車交通安全を担当した経済学部2回生の川出貴之さんは「彦根市内の自転車事故を調べると、最も多いのは出会い頭事故でした。自分の見えない場所からの飛び出しを多くの自転車利用者の方々に体験してもらうことが、出会い頭事故を防ぐために有効であると考えました」と話す。放置自転車の削減について考えてもらうブースでは、自転車が放置された歩道を再現。そこを来場者に車いすで通り抜けてもらい、放置自転車がどれだけ通行の妨げになっているかを考えてもらった。1月22日には授業のまとめとして、学生たちが彦根市長にこれまでの取り組みをプレゼンテーションした。

NEWS REVIEW



伊東孝紳・本田技研工業（株）代表取締役社長執行役員

倉田潤・警察庁交通局長

2013年Honda安全運転普及本部 年末ご挨拶会 地域社会と一体となった普及活動を今後も継続

昨年12月6日、Honda 青山ビルにて「2013年Honda安全運転普及本部年末ご挨拶会」が開催され、交通関係者約300名が参加した。報告会では、伊東孝紳・本田技研工業（株）代表取締役社長執行役員が「安全への取り組みは環境と並び、Hondaの最重要課題で、交通社会に参加するすべての人の安全を追求するため、グローバルスローガン『Safety for Everyone』のもとに取り組みを進めています。取り組みの具現化のために『ヒト（安全教育）』『テクノロジー（安全技術）』

「コミュニケーション（安全情報）」の3つの柱を定めました。それぞれを進化させると同時に、相互に連携することで『事故ゼロのモビリティ社会』を実現させたいと思っています。そして、本日お集まりの行政・民間団体の皆様と連携を密にして、幼児から高齢者までライフステージに応じた交通安全教育啓発活動を地域社会と一体となって今後も継続していきます」と挨拶。続いて、吉田宏樹・本田技研工業（株）安全運転普及本部事務局長が、2013年の安全運転普及活

動の報告と今後の取り組みについて、映像を交えて紹介した。最後に、来賓を代表して倉田潤・警察庁交通局長が挨拶。「交通安全の普及に関して、すべての人の安全をめざすという崇高な理念に基づく取り組みに感銘を受けました。地域に根ざした交通安全活動を展開するなど、国民の交通安全意識の高揚に多大なる貢献をされており、このような先進性・独自性のある活動は警察としてもたいへん心強く感じています」と述べた。報告会の後には、懇談会が開かれ、交通関係者の交流の場となった。